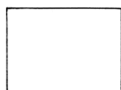


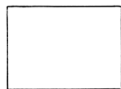
(3) 5×3



このような問題は、47年度にのみみる
ことができる。

例3 (3年の場合)

正方形で、1辺の長さともわりの長さ
のかんけいをあらわしているしきはどれ
でしょう。



(あ) $\square + \triangle = 4$	(い) $\square \times 4 = \triangle$
(う) $\square - \triangle = 4$	(え) $4 \div \square = \triangle$

このような問題は、47年度にのみみる
ことができる。

例4 (4年の場合)

つぎのかけざんをして、こたえを



にかきいれなさい。

<p>(1)</p> $\begin{array}{r} 4.7 \\ \times 8 \\ \hline \end{array}$	<p>(2)</p> $\begin{array}{r} 1.56 \\ \times 23 \\ \hline \end{array}$
---	---

このような問題は、43年度および47年
度にみるができる。

例5 (5年の場合)

3から10までの整数を3でわったとき
のあまりで分類して(2), (3)の { } に
あてはまる数を書き入れなさい。

(1) あまりが0となる数の集合

{ 3 6 9 }

(2) あまりが1となる数の集合

{ }

(3) あまりが2となる数の集合

{ }

このような問題は、47年度にのみみる
ことができる。

ここで、①と②を総合すると、学習指導要
領の改訂により問題の構成方法が変わり、し
かも問題の程度が高くなって、比較できない
指導内容の項目数(問題のねらいからみた)
が学年の進行によって多くなると考えること
ができる。

このことを裏返してみると、比較できる指
導内容は学習指導要領の改訂によっても不変
な内容で、それは算数科における最も基礎的
指導内容であるといえよう。

したがって、教師の経験的比較結果(現場
の声)は、算数科における最も基礎的指導内
容の学習結果の比較であると考えてよいであ
ろう。

(2) 変動についての考察

6の(1)の立場で、教師の経験的比較の実態
を「福島県標準学力検査問題報告書のdataが
統計的処理の素材となり得るという仮定」の
もとに、1の(2), (3), (4)の手法で数量化し、
5でその変動の分析を試みた。

その結果、次のようにまとめることができ
た。

- ① 1年についての基礎学力の変動は、この
10年間一定の状態にあると推測できる。
- ② 2年～4年についての基礎学力の変動は、
42, 43年度まで増加の状態にあり、その後
一定の状態にあると推測できる。
- ③ 5年についての基礎学力の変動は、35年